

研究ノート

ハイリゲンドム・サミットにおける「社会的排除に 反対する行進」と反グローバリズムの闘い ——ともに記憶をつくる

稲葉奈々子

1. 記憶の生成と社会運動

「もうひとつのグローバル化」を求める運動は、1999年11月の「シアトルの闘い」で幕開けとなった。北米では南北問題解消を主張するグローバル・ジャスティス運動、西ヨーロッパでは社会的ヨーロッパつまり1980年代半ば以降の新自由主義によって福祉国家の基盤がなし崩しに解体されることに異議を申し立てる運動として展開されてきた。

1990年代末以降のこれら一連の運動は反グローバリズムというひとつのカテゴリーをなしているが、その内訳は複雑で、共通のフレームやそこで用いられるレパートリーを明らかにする研究はすでに数多く存在する（J. Smith, *Social Movements for Global Democracy*, 2007, Johns Hopkins University Press; S. Tarrow, *The New Transnational Activism*, 2005, Cambridge University Press.）。

反グローバリズムで十把一絡げにされる運動だが、個々の運動はそれぞれのフレームやレパートリーを持つ。シアトルの闘い以降、「アフィニティ・グループ」が運動の核になっていることが指摘されている。数万人が集まるデモやフォーラムそれ自体は、「もうひとつの世界」や「グローバル・ジャスティス」で、大きなフレームはひとつである。この大雑把な括りだけでは人は動員されない。個々の運動はひとつのフレームに収斂したわけではない。個々に独立したフレームも持ち続けることを表現するために「複数の運動からなるひとつの運動（a movement of movements）」という言い

方がされたり（T. Mertes ed., *A Movement of Movements: Is Another World Really Possible?*, 2004, Verso.）、個々の運動がひとつの星のごとく独立性を持った存在でありながら、ひとつのまとまりをなしていることを表すべく「社会運動の銀河系」と言われたりする。これらの表現は、個々の運動は独自の論理を持って、個別の存在のままありつづけ、ひとつの大きな運動のなかで個が消えるわけでないことを示している。

この「多様性」は90年代以降の「もうひとつの世界」を求める運動のキーワードのひとつとなっている。かつてであれば、ひとつの運動を構成する個人や組織は、運動内部でのそれぞれの多様性はさほど重視しなかった。個々の多様性よりは、運動としての一体性のほうが優先された。

結果として現在の運動は直接民主主義を重んじる。代表民主主義では、多数決の名のもとにマイノリティの意見はつねに抹殺される。そうならない仕組みが、「コンセンサス方式」での合意形成である。

ただし、この方式で合意に達することができるのは、直接の議論を実質的に行える少人数のアフィニティ・グループか、誰もが合意できるような無難な提案しかなされないか、どちらかの場合である。

本稿は、ひとつのアフィニティ・グループとして、2007年のハイリゲンドム・サミットに対する抗議運動に参加した「社会的排除に反対する行進（以下「行進」）」の記録である。「行進」の第1回目は、1997年に、アムステルダム条約に反対して、ヨーロッパと北アフリカから2万人が参加する「社会的排除と失業と社会的に不安定な

地位に反対するヨーロッパ行進」として企画された。それ以降も、ケルン、ニースとEUサミットのたびに会場周辺で抗議行動が繰り広げられた。

「ヨーロッパ行進」は、シアトルの闘いを契機として、「もうひとつのグローバル化」運動に参加するようになっていった。もともと失業と社会的排除への抗議を全面に掲げていたため、運動の裾野の広がりとともに、ホームレスや非正規滞在外国人など、「持たざる者」の運動と行進をともに企画するようになった。

「持たざる者」の運動は、2003年のヨーロッパ社会フォーラムで呼びかけられた「NoVox（声なき者）の運動ネットワーク」を基盤としている。フランスを中心とするホームレスや失業者、非正規滞在外国人の当事者および支援運動団体がこのネットワークをつうじて、グローバル化にかかわる国際会議の場での抗議行動に参加するようになった。本稿の舞台であるハイリゲンダム・サミットに抗議する「行進」のキャラバンは、ヨーロッパ行進とNoVoxが相乗りする形で編成された。

「行進」には、失業者団体AC!、移民支援団体Droits devant!、住宅への権利運動Droit au Logement、NoVox、ATTAC、独立系労働組合の連盟Solidaires、女性世界行進、失業者やホームレス運動が当事者の手でドキュメンタリーをつくるグループ、カナル・マルシュなど20の団体が参加していた。日本におけるNoVoxのカウンター・パートである「持たざる者の国際連帯運動」は、東京と大阪の野宿労働者支援団体が積極的な担い手で、2名の活動家が行進に加わった。もともと2000年から日本の野宿労働者団体とフランスの失業者やホームレスの運動団体とは交流があり、行進や対抗フォーラムへの参加は、2004年ロンドンのヨーロッパ社会フォーラムとムンバイの世界社会フォーラム（WSF）、2005年ポルトアレグレでのWSFに続いてハイリゲンダム・サミットが4回目となる。

1999年以来、筆者は持たざる者の国境を越えた社会運動について調査を実施しており、ハイリゲンダム・サミットにさいしても、通訳と参与観察でキャラバンに同行した。以下の活動家の発言は、とくに明記しない限りは、筆者が1994年以降実施している参与観察とインタビュー

ーに基づいている。

1997年に「社会的排除と失業と社会的に不安定な地位に反対するヨーロッパ行進」を企画したクリストフ・アギトンは、行進の目的は「共通の記憶」をつくることにありと述べている。何かを一緒にやること、社会運動が歴史を動かすその場において、空間を共有すること。アギトンは、フランスの社会運動においては、フランス革命、パリ・コミューンなど過去の社会運動がリファレンスとして用いられてきたことを指摘する。「もうひとつの世界」を求める社会運動には、そうしたリファレンスになりうる出来事がなかった。過去の記憶は、社会運動のフレームのひとつであることは当然である。そしてリファレンスになる出来事がなければ、つくればよい。

過去の記憶はリファレンスであり、集合的な記憶になりうる。問題は、現在リファレンスとなるのは、ナショナルな社会運動しかないということである。未来にむけて新たにつくられる記憶のリファレンスは、それを一緒につくることでしか共有できる記憶にならない。ナショナルな社会運動であれば、過去に自分がそこに参加していなくても、現在の自分たちの権利が過去の運動の上に成り立っていることは自明であり、参照点となりうる。しかしグローバルな規模の社会運動となると、そうした基盤がないだけに、参加した者にとっての共通の基盤にしかなりえない。

「行進」もまた共通の記憶をつくる作業であった。「もうひとつの世界」を求める運動の構成員となること、記憶をつくることは、まだ「もうひとつの世界」が形成途上であるがゆえに、そこには対立的な関係も生じる。「行進」内部での対立、さらには「もうひとつの世界」を求める運動全体に対する対立は運動の進化とともに表出してきた。後者については、すでに概要を別稿で論じた（稲葉奈々子・樋口直人『『もう1つのグローバル化』へのオルタナティブ—世界社会フォーラムと『声なき者』の声』『アジア太平洋研究センター年報』第5号、2008年、pp.3-9.）。本稿では、前者に焦点をあてて、アフィニティ・グループのなかでの記憶の生成の過程を検討する。

2. 出発(5月22日)

「行進」の出発より一日遅れて日本から到着した木村（仮名）と山田（仮名）とともに、パリを出発して夜9時にベルギー国境の町、リールに到着した。フランス北部は、19世紀から、炭坑、繊維で栄え、戦後は自動車産業の中心地として発達してきた。しかし70年代以降の不況が直撃、現在ではフランスでもっとも失業率が高い地域となっている。リールはその中心都市である。

「行進」のメンバーは前日滞在したアラスからリールに到着して、デモの後の討論会を行っているところであった。ジュリアナとフランソワーズが駅まで迎えに来てくれ、会場までの車のなかで、前日までの経緯を教えてくれた。

アラスでは、雇用創出のために数百万ユーロの補助金を政府から5年間にわたって受ける契約で、1996年に操業を開始した世界第二位の自動車部品製造企業Delphi（本社アメリカ）に対する抗議行動が行われた。Delphiは契約どおり現地で従業員を雇用したが、5年と1ヶ月が経過したところで首切りが始まり、ハンガリー、韓国などに工場を移転、2007年7月までに600人全員の首が切られ、工場は閉鎖されるという。行進のメンバーは、工場閉鎖に反対する運動の担い手と交流した。労働組合は多国籍企業を相手にまったくなすすべもなかった。企業は、ひとりに対して5万ユーロの退職金を提示して、「自発的離職」を促した。5万ユーロは、3年分の給料プラス2年分の100%の失業手当にあたる金額だという。会社は、韓国とハンガリーに工場を移転すれば1年で、この退職金はとりもどけるといふ。

「行進」のコーディネータのルソーは労働組合の活動家である。集会で、連帯の発言を求められたが、マイクを手に、何も言葉を発することができず、言葉を詰まらせて涙を流したという。あまりに野蛮で露骨な資本主義に対して、労働運動が無力であることに、誰もが言葉を失うような現実だったという。

「行進」は行程上、各地の運動と交流しながら目的地を目指す。パリから出発した行進は、フランス北部のアラス、リールを経て、ベルギー南部のシャルルロワから北上し、ブリュッセル、リエージュ、そこからドイツにはいりアー

ヘン、ケルン、デュッセルドルフ、オスナブルグ、ハンブルグ、フライハイデを経て対抗フォーラムやオルタナティブ・キャンプ開設の地であるロストックに到着する。

1997年以来、ヨーロッパ行進を企画してきた「社会的排除と失業と社会的に不安定な地位に反対するヨーロッパ行進」のルソーは、郵便局の独立労組SUDの活動家であるとともに、LCR（共産主義者同盟）の黨員でもある。彼が企画してきた行進は、97年の行進の名前のとおり「失業」が重要なテーマのひとつであり、労働組合運動がリファレンスとなっている。

しかし99年のシアトル以降、問題の裾野は広がり、国際会議の会議場の前で抗議行動を展開するのが一つのレパートリーとして確立すると、ヨーロッパ行進もまた、そのひとつでなくなる。会議場をとりまいての抗議行動はヨーロッパ行進の専売特許ではないから、そのこと自体は問題ない。しかし、もっと枠を広げて他の運動団体ともいっしょに行動しなくてはならない。ところが失業者、ホームレス、女性、非正規滞在外国人の運動団体とひとつの行進を企画した2007年のハイリゲンダムは、不協和音の連続であった。

行進の経験のあるルソーが、具体的な計画を立て、各地での受け入れ団体や交流団体との折衝を行う。結果的には、ドイツのカウンター・パートも労働組合や極左政党が中心であり、各地での討論会のテーマも労働問題に集中する傾向があった。受け入れ団体がみつからない場所で、その他の団体の提案も却下された。ベルギーのリエージュでは受け入れ団体がみつからず、NoVoxは南北問題に取り組むNGOのひとつCADTM（第三世界債務帳消し委員会）との交流を提案した。「南」の国の債務問題は、反G8の運動の一貫をなす。しかし結局リエージュはスキップすることになった。ルソーにとっては、「行進」はひとつの記憶作りであり、「行進」という物語に一貫性がなければ共同性は醸成されない。ルソーにとっての共同性は労働を軸とするため、出発前から不協和が響き始める結果となった。

翌日は、リールから、19世紀から20世紀はじめに炭坑と鉄鋼で栄えたベルギーの町シャルルロ

ワへ移動。シャルルロワで炭鉱が閉鎖されたのは1985年だという。今も炭鉱労働者住宅が建ち並んでいる。現在では西ヨーロッパでもっとも失業率の高い町のひとつとなっており、2007年の失業率は30%であった。

地元の世界社会フォーラムの準備委員会がお昼のサンドイッチをとどけてくれた広場には、1956年の炭坑の火災で死亡した262人の労働者を慰霊する碑がたっている。当時周辺諸国から出稼ぎにきた労働者の10ヶ国の国籍が刻まれていた。

フランスの失業者団体AC !のフランソワーズが、「油性のフェルトペンはないか」とたずねて歩いている。碑に彫られている文章に間違いがあるので訂正するという。碑の裏側には、「1956年8月8日、炭坑の火災で262人が名誉ある労働のために死を遂げた」とあり、碑の表には「彼らが捧げた犠牲に団結せよ」と記されている。

フランソワーズは、フェルトペンで、「名誉ある労働 (HONNEUR DU TRAVAIL)」という箇所を、「恐怖の労働 (HORREUR DU TRAVAIL)」に訂正。「何が名誉だ。使用者の責任問題、労働安全の問題をすりかえるな。労働者の死を顕彰して団結を呼びかけるのもよくあるやり方だが、許せない」と。

広場からデモが出発すると一悶着。大阪の活動家が、1m×1.5mほどの自分の所属運動団体の旗を掲げたためである。ルソーは旗をひっこめろとまでは言わなかったが、「行進」は自分の運動団体の政治的な主張をする場ではないのに、なんだあれば、と不快さを隠そうとしない。旗には何も書いてないし、政治的な主張のためではないから、と周囲がとりなしたが、ルソーは「ヨーロッパでは、誰が見たって、赤黒は明白なアナルコ・サンディカリストだ」という。そして90年代の運動が、どれだけ苦労して、過去の政治色を払拭してきたかを説明した。住宅への権利運動は黄色がシンボル・カラー、ヨーロッパ行進は青、NoVoxはオレンジに紫である。AC !は白地に黒文字と無色に近い。それぞれの運動のメンバーは個々には強い政治色を持っている。しかしひとつの団体としては、過去の政治運動の連続線上で理解されないような配色を選ぶことに腐心してきた。未来に向けた新しい記憶の創造であるがゆえである。

デモの後に、ぼた山が森林となったところにコミュニティをつくって生活する野宿者たちを訪問した。自給自足を目指しており、ニワトリやカモも飼っている。排水も自然浄化システムを手作りして、土壌を汚染しない仕組みが工夫されていた。訪ねたときにはインゲンを植えているところだった。

夜は1886年に炭坑労働者組合による協同組合としてはじまった労働者会館で食事の歓待を受けた。シャルルロワ市の体育館で2泊することになったが、ACのメンバーは、体育館ではなく、ボタ山コミュニティに宿泊させてもらっていた。

行進のメンバーは、自給自足コミュニティや協同組合といった共同性への強い共感を示す。運動の主張においては、福祉国家の強化をもってしか実現できないような、政府による富の再分配が中心である。しかしそれは、連帯を供給してくれていた伝統的な共同体が解体したあとにも、個人がたった一人でものたれ死しない仕組みとしての福祉制度ではない。ともに作り出したものを、ともに再分配するという理解である。政府は再分配のマシンにすぎず、そこに「国家権力」という過剰な意味を読み込む必要はない、とNoVoxのアニー・プールは言う。

3. 共同性の構築(5月24日)

シャルルロワからブリュッセルへ。今は空き家になったイエズス会の教会の修道院部分を占拠している20歳から65歳ぐらいまでの60人が立ち退きになるというので、60人の当事者が作った住宅への権利団体の応援に駆けつけたが、すでに立ち退きは執行された後だった。修道院は20年前から空き家になっていた。イエズス会が売りに出し、スイスの不動産開発業者が購入、5つ星ホテルを建設予定という。

その後、欧州委員会の社会政策関連の部門に、「行進」のメンバー3人が代表して訪問。欧州委員会は、基本的に誰から面会を求められても応じるというだけあって、雇用問題、移民問題などについて、きわめて形式的なやりとりが行われたのみだった。

翌日、退去強制になったブリュッセルの運動団体が、別の建物を占拠したということで、応援に行くことになった。この日は、オランダか

らの行進がシャルルロワに到着する予定だったので、ブリュッセルに行ったのは9人だった。

新たに占拠したのは、自治体が所有している空きビルのガレージ部分であった。夕方になって、自治体がガレージに住み続けてもよいという許可を出したということで、お祭りムードになった。しかしNoVoxの数人は、「こんな劣悪なところにとどまりたくない、ちゃんとしたところをよこせ、というのが主張だったのではないか。こんな状態の悪いガレージに住み続けてよい、と許可されて勝利といえるのか。ここに若者10人ぐらいと犬が4匹住むことになったからといって、運動としてそれでよいのか」という疑問を提示した。しかし当事者たちがよい、というのだから、疑問をはさむ余地はない。フランスワーズは、占拠そのものは、住宅を得る手段であって、それ自体を目的化するのは、ちょっと違うような気がするという。しかし当事者たちは、家賃を払う「正規」の住宅に入居したいわけではなく、スクオッターに住み続けたいと思っている。とくに修道院のスクオッターに戻ることを希望している。スクオッター生活は、たんに家賃を払わなくてよいという以上の意味がある。シャルルロワのボタ山コミュニティのように、新しい共同性のあり方は、こういところから生まれるのかもしれない。ただしスクオッターでなければそうした共同性が生まれなわけではない。

4. 国境検問を越える(5月26日)

ケルンに移動。ドイツに入るときに厳しい検問が懸念されていたが、国境を越えたことにも気づかないうちにドイツに入ってしまった。ベルギー、オランダ、ドイツの国境に位置する西ドイツの町アーヘンに到着し、休憩。この国境を越えるために命を落とした人が60年前にはいたと思うと、国境を越えたことにすら気づかなかったことに、時代の変化を感じる。戦争のたびに国境線が何度も変わり、そこに住む人たちの運命も国籍も翻弄された時代が終わったのは、西ヨーロッパの人たちにとっては現実のものだ。しかし、それ以外の国の出身者にとっては、ヨーロッパの国境はもはや要塞のごとくそびえ立っている。キャラバンに加わっていた非

正規滞在のメンバーはベルギーからフランスに引き返した。ドイツの国境を越えるときに検問があったら、摘発されて強制送還になるおそれがあるためだ。

ケルンに到着すると、市庁舎で左翼政党のDie Linkeが歓迎の会食を用意してくれていた。オスカ・ラフォンテス率いるSPDの左派と旧東ドイツの社会党PDSから結成された政党である。

ケルンからデュッセルドルフに移動する途中、ケルンの工業地帯で製薬会社バイエルの工場を訪問。労働組合Ver.diと短時間だが交流。Ver.diは2001年に5つの労働組合が統合してつくられた。現時点で組合員は260万人で、公共サービス部門にとくに強い。EU統合以降、人員削減への反対が最大の課題となっており、医療サービス部門や、バイエル工場、ドイツテレコムなどで、数千人を動員するストライキをたびたび組織している。

デュッセルドルフに到着。霧雨が降り続く寒いなか、町の外側の高速の高架線の下で、ドイツ名物のプレッツェルのデュッセルドルフ版というのをおやつとしてもらい、立ち食い。

デュッセルドルフにはマンネスマンの本社がある。マンネスマンはVodafoneに買収されたが、これはドイツではじめての多国籍企業による敵対的買収だった。こうした多国籍企業の進出は、EU統合により加速されたもので、EU統合と労働条件の問題を関連づけるきっかけになったという。

それまでドイツでは、最低賃金を国家が制度的に定めることはタブーだったという。賃金は労使交渉により、企業ごとに定められるという合意があるためである。しかし多国籍企業の進出により、最低賃金制度を法制化することが議論されるようになってきた。しかし、労働組合のなかには、今も反対が強く、重要な課題のひとつであり続けている。

デュッセルドルフの左翼運動カフェが、集会の場となり、討論会。食事はベジタリアンがいることを明らかに意識した選択肢がたくさんある。フランスの社会運動団体にはないセンチティビティである。

最初の議論は、ドイツで新たに導入された給付制度HartzIVが紹介された。これは単純化すれば生活保護と失業手当が一緒になったような給

付で、受給者は清掃や地下鉄の警備などの仕事に従事することが義務づけられており、選ぶことはできない強制的な点が批判されていた。

二番目の議論は、飛行機の機内食のケータリングの会社で給料増を求めるストライキについての報告であった。現在、ドイツの労働組合が直面している問題は、派遣社員の増加と企業が団交に応じなくなってきたということ。飛行機の機内食ケータリングの会社Gate Gourmetが、まずはスイスエアのケータリング部門を買収したのちに、今度はみずからPacifictexを買収された。新会社はケータリング部門の借金を清算するために、作業のスピードアップと賃下げを行った。その後業績は上向きになり、2005年、労働条件の改善と賃上げを求めてストライキが打たれた。しかし企業は労使協定に違反しているとしてとりあわなかった。2005年9月からストライキを開始、6ヶ月にわたって有期雇用の従業員120人が闘った。会社はトルコ人派遣社員を雇用して対応したが、組合は空港に向けて荷を積む作業を封鎖するなどして、最終的には賃上げを勝ち取った。

デュッセルドルフでは、行政の支援が得られず体育館やユースホテルのような場所が確保できなかったため、行進参加者はばらばらになって、個人宅に泊まることに。私と大阪のふたりの合計3人は、Die Linkeの英語が堪能な大学生の若い活動家の家に泊めてもらった。

5. ウェストファリア体制確立の地(5月28日)

前日に集会を開いたデュッセルドルフの左翼カフェに集合、次の目的地オスナブリュックに向かった。ACIのバンだけは、オスナブリュックに立ちよると次の目的地まで車が持たないかもしれない、ということで直接オルデンブルグへ。

Ver.diが討論会をオーガナイズしてくれた。オスナブリュックはヴェストファーレン地域の中心都市のひとつ。30年戦争の講和会議が行われ、1648年、ウェストファリア条約が結ばれた都市である。30年戦争は、ヨーロッパの主要な国がほとんど参加しており、最初の国際戦争ともいわれ、ウェストファリア条約は、近代ヨーロッパ秩序を確立させたといわれる。この講和条約でフランスはアルザス・ロレーヌ地方を獲得、ス

イスとオランダが独立。ウェストファリア体制は、1990年代になって国家枠組みの相対化がいわれるようになるまで、確固して続いてきたわけで、「ウェストファリア体制の揺らぎ」と、グローバル化は無関係ではない。そういう意味で、オスナブリュックは、ヨーロッパ行進にとっては象徴的な町だ。

外で炭焼きのステーキやソーセージのバーベキューをふるまわれたのちに、オスナブリュックを離れ、オルデンブルグに到着。非正規滞在移民の行進と合流する地である。17時からデモを地元の反G8のオーガナイザーが呼びかけしており、駅前に集合。300人ぐらい集まっていた。No Lagerというグループは、黄色い使い捨て不織布素材のつなぎの作業着を着た人たちが、トラクターの荷台でさまざまな空の容器をドラムにしてリズムをとりながら、駅前広場に到着し、人目を引いていた。シンボルマークは、ペンチ。国境線や収容所にはりめぐらされた有刺鉄線をペンチでこじあけるイラストも掲げていた。他には、Kein Menschen nicht Illegalも目立っていた。

ペンテコステの祝日だったため、町は人気がないうえに、デモの経路がオフィス街なので通行人がほとんどいない。冷たい雨が降り続いており寒い。警察はデモの両側に壁をつくって歩いている。さらに警察のバス型車両の上からずっとビデオをとり続けている。ルソーによれば、逮捕したときに映像を証拠として使うためのものだから、シンボリックなポーズであっても、警察を攻撃するような態度をとらないように、ということだった。

デモが終わったあとは、ドイツのアナルコ・サンディカリストCNTの会館で食事。300人は軽く収容できる広さだ。ベガン(卵・乳製品も食べない菜食主義者用)向けの食事にも多様な選択肢がある。

夜8時から集会ということになっていたが、11時近くなってもいっこうにはじまる気配がないので、宿泊先に移動。ホテルに付属している宴会場に寝袋を広げる。ホテルのカフェでビールが飲み放題でふるまわれる。

翌朝、次の移動先のハンブルグの受け入れ団体との連絡がとれない、ということで、オルデンブルグの失業者団体で数時間を過ごすうち

に、ハンブルグの共産党事務所と連絡がとれ、そこが受け入れ団体というわけではないが、とにかく事務所に寝てもいいという約束をとりつけて出発するという事になった。

5月30、31、6月1日は、旧東ドイツの爆弾投下の実験場での抗議行動に参加するために、フライハイデというベルリンの北西80キロぐらいのところに滞在した。フライハイデは正式な地名ではなく、142平方キロメートルにわたり自然公園を横切って存在する爆弾投下の実験場に反対する運動による命名だという。ここがロストックに到着する前の最後の滞在地になる。

14の村が周辺にあり、湖水地方の美しさを観光資源にしており、旧東ドイツ時代から反軍主義の運動があった。今回は、この運動に連帯して実験場（といっても草原）の占拠に参加するために、地元の運動団体が格安で、バンガローをヨーロッパ行進のメンバーに貸してくれて、そこに滞在。とにかく美しく気持ちのいい初夏の風が吹いている。

現在はドイツ軍が、ロストックの南に位置する空港を離陸、フライハイデ上空から爆弾を投下し、フライハイデ南の空港に着陸する、という実験と訓練が行われる。

30日には、6キロぐらい離れたラインズベルグ村の教会で、抗議行動の場でオーケストラを演奏するミュージシャンたちのコンサートに招かれ、翌日の占拠について説明を受けた。

占拠は実験場の真ん中にある道路の占拠。実験場の両側から出発して、真ん中のピンク・ポイントに集結し、そこで翌朝まで占拠する予定だった。ピンク・ポイントとは、旧東ドイツ時代からの反対運動が、真ん中にある塔を占拠してピンクに塗ったことから付けられた名前だが、ドイツ統一後にドイツ軍がその塔を取り壊したために、現在は横断幕や旗が掲げられているだけということだった。まだ撤去されていない地雷が各所に残っているの、道路から絶対にはずれないように、という注意を受け、迷子になったときの行動の取り方などを説明された。

翌日、不測の事態。朝、「行進」が宿泊しているキャンプ場にドイツ警察が来て、まずは「アウトノミア派」はいないか、という取り調べがあった。これは、個人は別として集団としては存在しないので「いません」ですんだ。「私たち

は全員アウトノミアだ」という野次がとぶ。アウトノミアとは、フランス語にしまえば、「オートノミー」つまり自立しているという意味である。道路警察のほうは、「行進」がキャラバンで使っている車を点検ののちに、シャルルロワで合流したオランダ・グループのバスの車両が、ドイツの道路交通法の基準を満たしていない、ということで走行を禁止するという。オランダ・グループのバスは、真っ赤に塗ったバスで、中にテーブルを備え付けたり、コーヒーが飲めるような装置がついていたり、かんじはよい。しかし廃車寸前であることは疑いようもない。バスを捨てるわけにはいかず、道中取り締まりがないことを祈りながら、ロストックにこのバスで向かう以外に選択肢はない。フランスの失業者団体ACIのバンも、アフリカの都市を走っているような、ライトバンの荷台を改造して、座席をつけたようなもので、窓ガラスは割れて段ボールが張ってあり、後ろには炊事道具を含めた大量の荷物が詰め込まれていて、取り調べを受けたら、荷物の検査だけでも2、3時間は確実にかかる状態だったので、いつになったらロストックに到着するか分からない。そのため実験場占拠の行動を早々に引き上げて、ロストックに向けて出発した。

6. 新たな記憶の参照先構築をめぐるゲームの開始

私は、ロストックからの電車の切符を買ってあったが、ロストックにいつ入れるかわからないとなると、電車に乗り遅れる可能性があり、近くで一日に電車が4本しかない無人駅に降りてもらった。何のためにドイツに来ていたのか、現実感覚がなくなるような美しい初夏の湖水地方の景色を眺めながら電車を乗り継いで、2時間弱でベルリンにでた。

ベルリンでは、夜行の待ち時間に市内に出るべく駅のホームで路線図を眺め、ウンターデンリンデンへ。ウンターデンリンデンは、ベルリンを東西に分断していた壁の真ん中に位置するブランデンブルグ門の東ドイツ側の大通りである。地下から外にでると、すぐにブランデンブルグ門が見える。もはや壁の痕跡はどこにもない。冷戦が終わって「自由主義が勝った」、その

象徴となったベルリンの壁崩壊の場所。ベルリンの壁が崩壊したからこそ、新自由主義が世の中の「唯一正しい論理」として政治、経済を席卷していった。

歴史は、トランプ・ゲームのようだとクリストフ・アギトンという。先人が過去に負けたゲームも、またカードを配り直して、新しい闘いによってルールを変えることができる。ベルリンの壁が崩壊したあとの世界の再編によって、新自由主義というゲームのルールが支配した。しかし、こういう意味での「自由」に基づく世界を求めていたのではない。ふたたび新しいカードが配られる、そのゲームをどうやって闘っていくかを探りながらの行進は、今後も続いていく。

(茨城大学准教授)